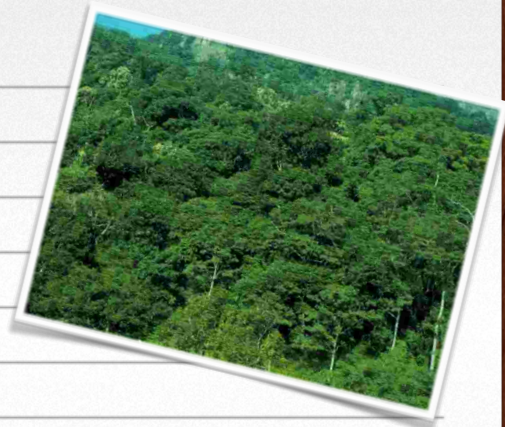
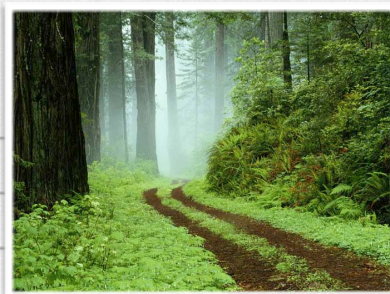




森を歩く 大山幹雄1923年生



日本は森の国だと思う。

50代のころから、森を歩くのを趣味にしてきた。

建具職人として木と関わり、木から恩恵を受けてきた者として、それらの木が生まれ育った故郷を訪れ、その場所の匂いを嗅ぎ、空気を吸い込むことで、木の本来の姿や思いを知りたいと思ったのが、森を歩き始めるきっかけだった。

さまざまな建具をつくり、新築の家に備え付けられると、木は私の手元から離れ、その家の住民の人生と共に歩き始める。木の第二の舞台だ。私は母なる森からその木を受け取り、第一の舞台から次の舞台へと送り出すために、加工する。

素直な木もあれば、頑固で強情な木もある。

それぞれ個性があり、味わいも深い。ひとつとして同じものはなかった。

ひとつひとつがまったく違うから、こちらのやり方もひとつひとつ変わる。

微かな木の声に耳を傾けると、木が語り始めることがある。

しかし、よほど注意深くなしないと、その声はあっという間にもやの中へと消えてしまう。



ちゃんと木の思いを知りたくて、私は森を歩く。

その木がどんな場所で生まれ育ったのか、どんな気持ちを抱いてきたのか、今どんな心持ちでいるのかを知るために、

その木の第一の舞台を感じに、今日も森を歩きに行こう。